

氏 名	藤 本 康 雄 ふじ もと やす お
学 位 の 種 類	工 学 博 士
学 位 記 番 号	論 工 博 第 224 号
学位授与の日付	昭 和 43 年 9 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	ヴィラルール・ド・オヌクールのアльバムに関する研究

論文調査委員 (主 査)
教授 川 上 貢 教授 増田友也 教授 西山卯三

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は13世紀フランスゴシック盛期、フランス北部のピカルディ出身の建築家ヴィラルール・ド・オヌクール (Villard de Honnecourt) とその後継者たちが遺したアルバムに関する研究であり、序、4章、結論からなる。

まず第1章ははじめにアルバムの概要と沿革について述べ、次にアルバム研究の経緯を明らかにしている。即ち、ヴィラルールは12世紀末頃、北フランス・ピカルディの町カンブレに近いオヌクール村に生まれ、ヴォーセルのシトー派修道院で教育をうけたらしい。そしてカンブレやサン・カンタン等で建築の仕事に従事し、1235年頃にはハンガリーに招かれてその建築に関係しており、これらの建築仕事に役立てるために国内各地の建築をたずねて見聞した事柄をスケッチした。このスケッチ集つまりアルバムは羊皮紙に鉛か銀で下描きした上に褐色のインキを用いペンで線描きしており、のちに図の解説文を加えている。アルバムは現存しているのは33葉だが、最初は少なくとも60葉以上あったらしいと推測され、また解説文は大部分が13世紀ピカルディ語で、一部にラテン語で記されており、筆蹟からヴィラルールが大部分の図と説明を記し、次にマスター2およびマスター3が一部補筆修正し、新しく解説を追加したと考えられている。アルバムはヴィラルールからマスター2およびマスター3にわたり、15世紀にはJ. マンセルなる人物の所有に移りそしてエリビアン家の者の手に移ったらしい。17世紀にはアンドレ・フェリビアンがこのアルバムらしいものについて書きのこしており、彼の二人の息子の何れかによって18世紀初頃にサン・ジェルマン・デプレ教会堂に寄贈されたとみられる。大革命後、アルバムは国の所管に移され、現在はパリーの国立図書館に所蔵されて貴重本として大切に扱われている。

19世紀半頃にJ. キシュラ (Quicherat) がアルバムを始めて世に紹介してから今日まで欧米ではアルバムについて各種の研究がみられ、その研究史はおおよそ三期に分類されることを述べ、第一期は1849年にJ. キシュラがアルバムに関する最初の論文を発表しており、これに示唆されてラシュスが手写本発刊に着手し、1858年ラシュスのあとを受けたダルセルによって完成発行され、翌年にはウィルスが手写本の英訳

本を出して、アルバム全容が世に知られるようになり、ヴィオール・デュク・ベナール、アンラール他の人々によって関係論文が発表されている。第二期は1935年にハーンローザがそれまでの研究を集大成し、豊富な資料にもとづいてアルバムの全般について論証し、アルバム研究に新紀元を画する大きな業績をあげた。第三期は第二次大戦後、アメリカの研究者によりアルバム研究の精緻化が進められ、他方にアルバムの複写「普及版」が出版されるなどアルバムの史料価値に注目し、ゴシック建築とそれらをつくった人々の立場や技術に関する建築史研究に多く引用され役立てられている傾向にあることを論じている。

第2章はヴィラール・ド・オヌクールのアルバムの内容を各葉に描かれた図と文字および解説文についてそれぞれの意味内容を明らかにしており、ラシユスの現代フランス語訳、ハーンローザのドイツ語訳、ボウイの英語訳と原文を比較対照し、その間の異同を吟味して原文に即した定訳を与えて、ゴシック建築ないし中世美術史研究のために同上アルバムが史料として役立てられる以前における史料批判を行ないその内容の公正を期している。

第3章は前章で明らかにしたアルバムの内容を通じて、アルバムに関しこれまでに発表されている諸研究における問題点をとり上げ、まずアルバムの作者と年代を、次にアルバム内容の配列について論じている。即ち、アルバムの大部分がヴィラール・ド・オヌクールの手になること、そして彼が建築家であったことについては諸説とも一致している。しかし、ハーンローザはヴィラール以外にマスター2およびマスター3の二人の工匠がアルバム作成に参加していて、マスター2はラテン語を多用し、石工事、ポルトレイチュールなど技術的な事柄の大部分が彼の手になること、そしてマスター3の記述は僅少であることなどを明らかにした。更にブランナーは上記3人の他のマスター1の存在を筆蹟から推定し、彼をヴィラールとマスター2の中間に位置しており、また、マスター2の手になる図の内容と配列そして説明文の形式から、それらのモデルになった原本の存在を推定している。このブランナーのマスター2の記述の一部(図39)を原本からの引き写しであるとする説について、著者はヴィラルの図にマスター2が説明を加えている箇所(図40・44)にみる記述形式が図39のそれに等しいことを指摘してブランナー説に疑問を提出している。次にアルバムの成立年代について諸説を比較検討し、その描き始めの時期を1220年代と考定し、ヴィラールはハンガリーに行くにそなえてフランス身廊窓をスケッチし、ハンガリーから帰国後カンブレのモデルにするために再びフランスを描き、1227年からカンブレ教会堂を建てたのであろうと推定している。アルバムの内容については各葉の図を項目別に分類すると「建築家の仕事に関するもの」と「彫刻家の仕事に関するもの」に二大別でき、前者では「建築図面」と「石工事」、後者では「ポルトレイチュール」がそれぞれのグループの大半を占めており、これらにすべて共通する要素として「幾何学に基づいた方法」をみいだすことを指摘している。なお、図の配列はかなり雑然としていて、前後の関連性に乏しく、ボウイの主題別に配列する新しい試みも同一葉に異なった主題の図が含まれるため聊か無理であり、原形を大きく変形してしまう結果におわる危険のあることを批判している。

第4章では同上アルバムにみるゴシック建築家の方法について述べている。まず、建築図面の種類は今日の概念には近い内容をもつが、すべての図が部分を描き、建築全体をあらわすものをみいだせない。図のなかには透視図風手法を用いているが、これは厳密には透視図ではなくて、各面の形と性格を示しながら前後の出入関係を表現するために当時の工匠が考え出した作図上の工夫を示すものとする。また、

面積比が2:1になる2個の正方形の組み合わせで建築部分の比例をつくるいわゆる「ロリッツァーの方法」(四角法)がアルバムの図の作図に使用されており、フランクルの指摘する以外にもヴィラルールは各種の図を描くに当たっての方法を多く用いていること、そしてクロイスターの実例やサン・ドニでの使用を推定しており、15世紀に「秘儀」扱われたこの手法もヴィラルールの時代には必ずしもそうでなかったと考えている。

次に、石工と規矩術について述べ、ブランナーが図 40c, d についてアーチの種類に応じて要石を割り出す手法を示すものと考え、三分点、四分点アーチの定義に新説を提起したのに対し、著者は要石の野書きに際して三分点、四分点の取り方によっては従来の定義によりアーチの形で差し支えないことを論証し、ブランナーの説を否定している。また、迫石の割り出し法とスケアの用法について、ブランナーの説は具体的でなく、スケアの形がアーチ毎に異なっていたと考える点に疑問をもち、当時石工が使用していたスケアの形について、アルバムの図に散見され、他の例に図示されるものによって、スケアの長い腕の両縁の間の角が5°につくられていることを明らかにし、腕幅のとり方によって一つのスケアから現場尺をもとにした各種の半径の迫り石を割り出し得ることを論証している。

おわりに形取り法 (portraiture) と幾何学について述べており、アルバムのなかで使用されている形取り法の語の意味と多数の図柄の関係について検討し、形取り法はフランクルの説のように図像の拡大法・転写法として用いられる以外に、略画法として用いられたこともあったと考える。その理由として形取り法に使用される幾何図形はフランクルやこれまでの研究者が漠然と考えている恣意的なものでなく、ある一定の寸法単位を用い、各図形の成分にそれぞれある種の比例関係がみられることを指摘している。そして基本になるのは3種の16目方眼であり、それらの方眼目盛の間には3:4:5の対応関係がみられることを示す。つまり、中世の工匠達は彼等自身の技術経験としての幾何図形を通じて物の形をとらえ、これを表現しようとし、そこにおける幾何学の有用性を重視していたと考える。

以上の研究を通じてヴィラルールのアルバムそのものの全貌を明らかにすると同時に、そこにヴィラルール達ゴシック建築家のあり方と、その技術的手法と建築の関係を把握することができたと考え、アルバムを通じて中世建築研究の可能性を本研究が示すものであると結論している。

論文審査の結果の要旨

本論文の主題でありそして主史料でもある「ヴィラルール・ド・オヌクール」のアルバムとは13世紀の北フランス、ピカルディ県出身の建築家ヴィラルール・ド・オヌクール (Villard de Honnecourt) とその後継者たちが書きのこしたアルバムをいい、現在はパリの国立図書館に所蔵されている。このアルバムは19世紀のロマンチズムの時代に再発見されゴシック芸術への回帰を目指す建築家や考古学者の注目するところになり、彼等の間に大きな反響を呼び起こした。その後1935年に Hahnloser が同上アルバムに関するはじめての書誌学的研究を大成し、ゴシック建築ないし中世美術の研究のための直接的文献資料として同上アルバムの価値を認識させることに大きく貢献しており、第二次大戦後のアメリカで著しい進展をみた中世美術研究では Hahnloser の成果をもとに同上アルバムについて多くの新しい問題が提起され、ゴシック建築技法あるいは建築思潮の研究促進に重要な部分を演じている。

さて、本論文は上記の同上アルバムに関する従来の研究を総合的に整理検討し、はじめにゴシック建築技術ないし中世建築研究の基礎的資料としてのアルバムの全容を明らかにし、その内容を通じてゴシック建築家の在り方とその技法と建築の関係について新見解を提示している。

まず第1章ではアルバム全体の構成について体裁・紙質・枚数・記載手法・図と説明文の筆蹟種別そして筆者についてその概要を述べ、次にアルバムが世に出るまでの変遷を明らかにし、今日まで約1世紀の間を通じての研究経過をあとづけ、その第1期は識者の関心の対象として研究前史をつくり、第2期はアルバムそのものが研究の材料になって研究を完成の域に近づけ、第3期にはアルバムがゴシック建築研究上の史料として取扱われ、アルバムの内容に細部的検討が加えられる一方に、アルバムに対する認識が普遍されつつある事情を明らかにしている。

第2章ではアルバムの内容を構成する図柄と説明文を個別に検討し、アルバムの理解に欠くことのできない説明文の解説とその邦訳および個々の図柄の意味と内容の吟味を行なっている。13世紀ピカルディ語とラテン語からなる説明文の解説には Lassus, Hahnloser Bowie などの現代語訳を比較参照し、それらの間の異同を明らかにし、また一部の図柄については Lassus や Hahnloser の解釈を修正する見解を提出している。

第3章ではアルバムの作者、年代そして内容の分類と配列に関する新説を紹介し、既往の諸説と比較検討を行なっている。まず作者についてはヴィラルールがその大部分の図柄を描き説明文を書いた、そして彼から（あるいはマスター1を介して）マスター2に引き継がれ、マスター2はその一部を修正し、説明文を補足してアルバムの教科書的体裁を整えた。その後マスター3に伝えられ、僅かな加筆がなされたという過程を確認すると同時に、Branner が主張するマスター2によるある種の本からの引き写しについて若干の疑点を指摘している。

また年代についてアルバム内容にみるヴィラルールの活動を通じてアルバムの始終の時期を推定する既往の説明を批判検討し、ランス会堂の身廊図と内陣図の作成年時およびハンガリー旅行期間について新説を提示し、アルバムの始期年時を1220年頃にさかのぼらせることも可能であるという。更にアルバムの図の配列について、図の内容別による分類を行ない、図の構成を秩序づける何らかの要素をみいだすことに努めた結果、著者はアルバムの内容構成は「建築家の仕事」と「彫刻家の仕事」に大別できること、そしてこの両者に共通する要素に「幾何学に基づいた方法」の採用がみられるという新事実を明らかにしている。

第4章ではヴィラルールのアルバムに見るゴシック建築家の方法について述べており、また建築図面に関して、アルバムにみる建築図面が極めて初歩的段階ではあるが、ほぼ今日の建築図面に含まれる性格をもっていること、特に立面図と透視図について、中世の独得な表現手法が存在していたことを明らかにする。また、内接双正方形の比例関係を基にして「四角法」(Roritzer's rule) は Velte の指摘する Laon の塔の図似外にも、ヴィラルールがアルバムの作成にしばしば用いられていること、更にこの方法は作図や石の割り出し、建物部分の寸法の決定に用いらただけでなく、建物の平面計画にも用いられたことを実例を挙げて論証している。

次に石工と規矩術に関して、要石や迫石の割り出し法について、Blanner の説を検討し、その問題点

を指摘して新見解を示しており、特にゴシックの石工が用いたスケアの形とその用法をとりあげ、スケアの腕の形が1～2現場尺の長さで現場寸による幅で定められており、腕の外縁と内縁が5°のかたむきをもつことと追石の割り出しに密接な関係がみいだされるなどの新知見をだしている。

「形取り法」に関しては、ヴィラールの描いた幾何図形がそれぞれ作図上の根拠として、二等辺三角形、ピタゴラスの直角三角形、あるいは $1:\sqrt{2}$ や 3:4:5 の比例関係をもつことを示し、「形取り法」の意味するところは Frankl の説くように図像の拡大・転写のための方法に止まらずに、略画法としても大きい意義をもつことを強調しており、中世の工匠達が彼等自身の技術としての幾何図形を通じて物の形を把握、これを表現しようとした態度と方法を推察している。

以上要するに本論文はヴィラール・ド・オヌクルのアルバムについて既往の古典的研究書と報告にみる諸説を批判検討しながらアルバムの全貌を明らかにしており、同時にヴィラールたちゴシック建築家の技術的手法と理念について新見解を提出している。

このように本論文の内容は学術上に貢献するところが少なくない。よって本論文は工学博士の学位論文として価値あるものと認める。